

量・程度・限度——「ばかり」の意味解釈を中心にして——

原田 康也 (早稲田大学) ・ 本多 久美子 (早稲田大学非常勤講師)

1 はじめに

ある語彙的要素は、それに固有の<意味>とさまざまな文脈・言語外的状況との相互作用により、それぞれに応じた<解釈>を得るが、本稿では、こうした立場から、「ばかり」について検討する。

- (a) 若者向けの雑誌ばかりが創刊される。
- (b) 海岸まで4キロメートルばかりある。

ここで、(a)は複数の「若者向けの雑誌」が「創刊される」という事態量化を¹、(b)は「海岸」までの距離「4キロメートル」の概数的な程度をあらわすように見える。このように、同じ「ばかり」をともなう表現であっても、(a)と(b)は、先行詞や文脈を含めた<状況>に応じて<量化>と<程度>という異なる解釈を得ることになる。

本稿では、「ばかり」をともなう表現に見られるさまざまな<解釈>について、<状況>と<解釈>との関わりという観点から、以下に若干の考察を試みる。

2 「ばかり」

「ばかり」をともなう表現の特徴を見るために、「だけ」をともなう表現との違いを見てみよう。

- (1) 授業では、太郎ばかり質問した。
- (2) 授業では、太郎だけ質問した。

この(1)(2)に共通するのは「質問」者が「太郎」に限定されるという点である。しかし、(2)は「太郎」が1回だけ「質問」するような状況においても適切な発話となるのに対して、(1)は、「太郎」による「質問」が複数回なされ、かつ、その複数回の「質問」のすべてが「太郎」によってなされる場合にのみ適切な発話となる。

「ばかり」をともなう表現に見られるこうした全称表現的な性格は、次の例に、より明瞭に見られる。

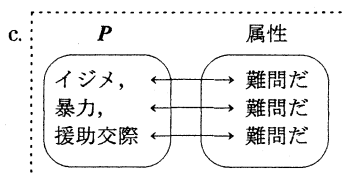
- (3) a. 会の発起人11名は、全員、女性ばかりだ。
- b. 会の発起人11名は、女性ばかりだ。

この(3a)では、語彙的に全称量化をあらわす「全員」という語が用いられているが、そうした要素をもたない(3b)においても、「会の発起人」の集合 P の構成要素

p_1, p_2, \dots, p_{11} のすべてが「女性だ」という属性を共有することには変わりはない。このように、ある集合に属する要素のすべてが共通の素性をもつことは、「ばかり」の全称量化詞的な性格を示すものと言える。

さらに興味深いのは、「ばかり」文が、 P の構成要素 p_1, p_2, \dots, p_n に個別的に言及するような語彙的要素をともなうケースがあるという点である。

- (4) a. イジメ、暴力、援助交際と、教育をめぐる問題は、それぞれが、難問ばかりだ。
- b. イジメ、暴力、援助交際と、教育をめぐる問題は、一つ一つが、難問ばかりだ。



(4a)の「それぞれ」、(4b)の「一つ一つ」といった語彙的要素は、(4c)に示したように、 P の構成要素と属性との個別的な対応関係をあらわすものである²。

「ばかり」はこのように量化を導入するが、そこには、1つの<事態 case>を単位とする<事態量化 case quantification>のメカニズムを見ることができる。

3 量化

「ばかり」をともなう量化表現は、「ばかり」の統語的な相違によって、異なる意味内容をあらわす場合がある。

- (5) 砂浜には、若者ばかりが寝ころんでいた。
- (6) 砂浜には、若者が寝ころんでいるばかりだった。

この(5)では「若者」の量化にともない〔若者が寝ころんでいる〕という事態が量化されるのに対して、(6)では「若者」が量化されず〔ある若者が寝ころんでいる〕という状態の継続があらわされる場合もある。このような相違を踏まえて、「ばかり」をともなう量化表現における事態量化のメカニズムを考えてみよう。

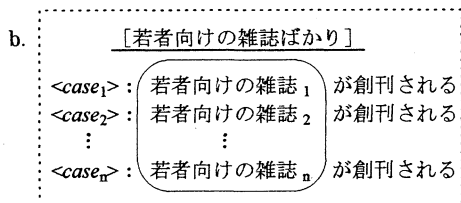
² (3a)の「全員」は、(4a)(4b)の「それぞれ／一つ一つ」とは異なり、 P の構成要素に個別的に言及するものではないが、(3a)のようなケースにおいても、「ばかり」が関与する事態量化のメカニズムは、(4c)と同型のものと考えられる。

¹ 後述するように、本稿では、「ばかり」の限定用法は「ばかり」に本質するものではなく状況によって導入される解釈の1つと考える。

3.1 量化 I

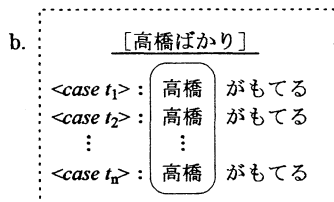
「ばかり」が名詞相当表現に後続する場合の量化のメカニズムは、次のようなものである。

- (7) a. 若者向けの雑誌ばかりが創刊される。



この(7b)は、「ばかり」が名詞相当表現に後続する場合、量化されるものが単なる<事物 object>ではなく、<事態 case>であることを示したものである。こうした<事態量化 case quantification>は、すでに(1)でも見たように、名詞相当表現が固有名詞相当の場合にも見られる。

- (8) a. テレビでも新聞でも、高橋ばかりがもてる。



この(8a)は、さまざまな「テレビ」や「新聞」のメディアで「高橋」選手がとりあげられることをあらわしたものであり、例えば、<case₁>が「1998年2月6日「プロ野球ニュース」」での報道に言及するものであれば、その時空において「高橋がもてる」という1つの事態 case が生じたことになる。「ばかり」は、こうした個々の事態 case の全称量化を導入するが、名詞相当表現に「ばかり」が後続する場合は、<同時的 parallel 量化>と<順次的 serial 量化>の両者が見られる³。

3.2 量化 II

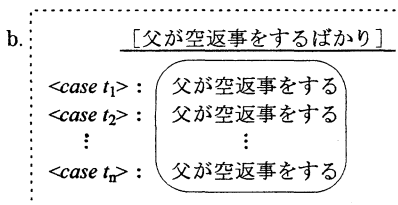
「ばかり」が動詞相当表現に後続する場合⁴の量化の意味解釈は、動詞の aspectual な意味と関連をもつ。ここでは、行為動詞、変化動詞、状態動詞の3つの例を

³ ここで、<同時的量化>は複数の事態が同時に成立するような事態量化を、<順次的量化>は複数の事態が時系列的な順次性をもって成立するような事態量化をあらわす用語として用いている。詳細については、原田・本多(1998)を参照されたい。

⁴ 「ばかり」は「飲んでばかりいる」のように[て]節に後続する場合もある。これは、[Vテイル]という量化に、さらに「ばかり」による個別的な<事態量化 case quantification>が累加されたものと考えられるが、この点については紙幅の都合もあり別稿に譲る。

見てみよう。

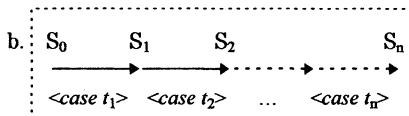
- (9) a. 父は、何を聞いても、空返事をするばかりだった。



この(9)では、「何を聞いても」で言及される n 回の時系列的な状況において、それぞれ「父が空返事をする」という事態 case が生じたことをあらわすが、これは1回性の事態が順次的に繰り返されることでもある。

一方、変化動詞に「ばかり」が後続する場合、<変化>の繰り返しは、時系列にそった連続的な状態変化をあらわすものとなる。

- (10) a. 彼の病状は悪化するばかりだ。



この(10b)では、case₁, case₂, ..., case_n という順次的な事態量化を、状態遷移として図式化しているが、ここで、個々の case は「彼の病状が悪化する」ことをあらわす。(10)に見られる連続的な状態変化は、ある<変化>の繰り返しをあらわすが、先掲の(6)や次の(11)のように、状態動詞に「ばかり」が後続する場合は、ある状態の<継続>があらわされることになる。

- (11) 窓の外は、白い雪が見えるばかりだ。

この(11)で、個々の case は「白い雪が見える」という状態に相当するが、(11)はそうした同一状態の繰り返し、すなわち同一状態の時間的な継続をあらわすものとなる。このように、動詞相当表現に「ばかり」が後続する場合、動作主体の同時的量化をとまなわない限り、そこに見られるのは<順次的量化>のみである。

3.3 量化と限定

[ϕ ばかり]は、対立項 ϕ があらわれる環境では<限定>解釈を受けやすい。この対立項 ϕ と ϕ は、[ϕ ばかりか ϕ も]や[ϕ ばかりでなく ϕ も]等の構文をとる。ここではまず、次の(12)の[ϕ ばかり]が、 ϕ を含む事態 case の量化をあらわす点を確認しておこう。

- (12) 人生は辛いことばかりだ。

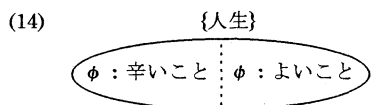
次に[ϕ ばかり]が対比項 ϕ とともなうケースを見てみよう。

- (13) a. 人生は辛いことばかりか、よいこともある。

- b. 人生は辛いことばかりでなく、よいこともある。

この(13a)では「か」という disjunctive な等位構造を

導入する語彙的要素が、(13b)では「～ばかりでなく～も」という conjunctive な等位構造をあらわす構文が用いられている。この(13)に共通する「辛いこと」と「よいこと」の関係は、次のようなものである。



この(14)は、{人生}という集合が「辛いこと」と「よいこと」に直和分割されることを示している。このとき、辛いこと \cap よいこと $=\emptyset$ となるが、こうした両者の関係を導入するのが「か」や「でなく」といった語彙的要素である。[ϕ ばかり]が対立項 ϕ をもつとき限定解釈を受けるのは、[ϕ ばかりか]や[ϕ ばかりでなく]が、(14)のような対立項 ϕ の存在を推論させることに起因する。「ばかり+か」や「ばかり+でなく」は、 ϕ の導入のために、 ϕ に対する<限定>の解除として機能することになるのである。このように<限定>は「ばかり」の語彙的意味ではなく、状況的に対立項が導入されることによって生じるものと考えられる⁵。

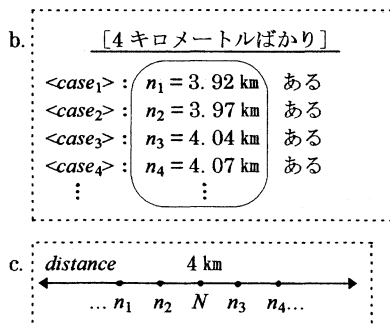
4 程度

ここでは、「ばかり」と量化の関わりという観点から、「ばかり」の程度用法について考えてみよう。

4.1 程度 I

程度用法の「ばかり」の典型としては、次のような[数量詞+ばかり]があげられる。

- (15) a. 海岸まで4キロメートルばかりある。



(15a)の「4キロメートルばかり」は、(15b, c)に示したように、距離的な scale 上の点 $N(umber)$ を特定することなく、 $n_1, n_2, n_3, n_4, \dots$ といった近傍点への言及を含意する表現として機能している。これは、すでに見てき

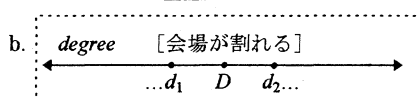
⁵ 対比項 ϕ をとともなわない[ϕ ばかりではない]においても、状況的に ϕ が導入されることに変わりはない。なお、「形ばかりの挨拶／春とは名ばかり」のように、<限定>の意味合いが固定化した表現も見られる。

た「ばかり」の量化機能と変わるところはない。「ばかり」による N の量化は、 $n_1, n_2, n_3, n_4, \dots$ といった N の近傍点を派生させるが、逆に、 $n_1, n_2, n_3, n_4, \dots$ に共通する素性はこれらの収束値 N となる。このように、「ばかり」の程度用法は、量化機構に基づいた説明が可能である⁶。ここでは、数量詞を先行詞としてもつことによって scalar 解釈が導入され、その scale 上において<同時的 parallel 量化>がなされると考えられる。

4.2 程度 II

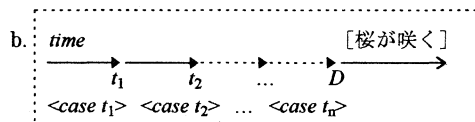
程度用法の「ばかり」とされるものには、比喩を用いた、次のような表現がある。

- (16) a. 会場も割れんばかりの拍手。



この(16a)の「会場も割れんばかり」は、(16b)に示したように、「拍手」の大きさの程度 *degree* をあらわす表現であるが、実際に「会場が割れる」ような「拍手」の大きさを D とすると、 d_1, d_2, \dots といった D の近傍への言及を含意する表現として解釈することができる。もちろん「拍手で会場が割れる」という事象は通常の生活では経験し得ないことであるが、比喩（隠喩）表現がもつこうした特徴は、可能世界でのみ成り立つような極限的な状態を極限的な程度としてあらわすことを可能にする。一方、こうした比喩表現が、可能世界でのみ真となり現実世界で偽となることは、次のように<時間>的な事態量化の可能性を示唆するものでもある。

- (17) a. 桜の蕾はふくらみ、いまにも咲かんばかりだ。



言うまでもなく、(17a)は「桜が咲いた」状態をあらわす表現ではない。今、(17b)の D の時点で「桜が咲く」という事態が実現するとするなら、(17a)のあらわすものは D 以前の<時間>における状態である⁷。(17b)の $case\ t_1, case\ t_2, \dots, case\ t_n$ は、それぞれ「桜が咲かん」こと、すなわち「桜が咲く」の未実現事態の量化をあらわすものとなる。これは、現実世界においては「いま

⁶ 「せめて1時間ばかり待ってほしい」のように、「ばかり」の先行詞 ϕ が少量解釈をもつ場合、[ϕ ばかり]は限度解釈を受けやすいが、こうした限度解釈も文脈・状況によって導入されるものの1つと考えられる。

⁷ (17a)の「いまにも咲かんばかりだ」が「いまにも咲きそうだ」といった表現に類似した意味合いをもつことも、(17a)のような表現における<時間>的な事態量化の可能性を示唆するものと考えられる。

だ桜が咲いていない」状態に相当するが、可能世界においては「いまにも桜が咲くであろう」状態をあらわすものとなる。こうした可能的な case が可能世界の時系列に即して量化されることを図示したのが(17b)である。と同時に、「咲かんばかり」が「桜の蕾」の「ふくらみ」方の極大値 D をあらわすものであることから、(17a)は D の近傍への言及を含意する表現としても解釈することができる。次の(18)は、こうした2つの解釈に根拠を与えるような語彙的要素をとともう表現である。

- (18) a. いまにもこぼれんばかりの笑み。
b. いかにもこぼれんばかりの笑み。

この(18a)は「いまにも」をともなつて(17b)と同様の可能世界の時系列に即した事態量化を、(18b)は「いかにも」をともなつて可能世界における極限程度をあらわす表現として解釈することができる。ここでは、「いまにも」と「いかにも」が、それぞれ<時間>と<比喩>という意味的側面をより際立たせるような語彙的要素として機能していると考えられる。しかし、こうした2つの解釈は、相互交渉的な解釈として捉えるべきものである。この2つの解釈は、それぞれ<量化>、<程度>と言い換えることができるだけでなく、<順次的 serial 量化>、<同時的 parallel 量化>に相当するものでもある。[ϕ ばかり]において、こうした2つの解釈が状況によって分化するとしても、[ϕ ばかり]そのものにおいては両者が共存することを、この比喩をとともう「ばかり」文のあり方は示唆するように思われる。

比喩表現に限らず、語彙的に極限程度をあらわすような要素を先行詞としてもつ場合には、次に示すように[ϕ ばかり]は程度解釈を受けやすい。

- (19) 時代の急速な変化には、驚くばかりだ。

この(19)は、先掲の(9)や(11)の場合と同様に、「時代の急速な変化」に「驚く」ことが繰り返されるという解釈が可能であり、この場合には単なる事態量化をあらわすと言えるが、「時代の急速な変化に非常に驚かされる」といった「時代の変化」の「急速」さの極限的な程度をあらわすとも解釈される。これは「驚く」という先行詞の意味内容に依存した程度解釈である。

4.3 程度 III

前節で見た時系列的な scalar 解釈を含意するのが、次のような時間限定用法の「ばかり」である。

- (20) 各選手、スタート・ラインに揃って、今やスタートするばかりだ。
(21) たった今、生まれたばかりの赤ちゃん。

この(20)と(21)は、事態実現の時点より以前に言及するか、以後に言及するかという違いをもつ。これは、「ばかり」による事態量化の観点からは、 T においてある事態が実現するような時系列的な scale 上において、 T 以前の時系列上に、未実現事態の集合として量化され

るか、 T 以後の時系列上に、既実現事態の集合として量化されるかの違いに相当する。ここでは、「今や／たった今」といった表現が、事態量化の時間的な全称領域>となっている点にも留意したい。

5 量・程度・限度

量化詞「ばかり」をとともう表現における<量>と<程度>について、次の例で考えてみよう。

- (22) 昨日の練習では、1キロばかり走った。

この(22)では次の2つの解釈が可能である。(i)「1キロ」のコースを「走る」ことを繰り返した、(ii)「1キロ」を概数的な距離とする量を「走った」。前者の「ばかり」は<量>を、後者のそれは<程度>をあらわすものとなる。この違いは、後者における「1キロ」が距離という量的な scale を導入する点に起因する。先掲の(19)における意味的な曖昧性も、「ばかり」の先行詞が scale を導入するような要素として解釈されるか否かによるものである。「ばかり」は、<事態 case>に対しては<事態量化 case quantification>として機能し、量的な<scale>に対しては scale そのものを量化するのではなく、一定の scale 上に<同時的>あるいは<順次的>に事態量化を行うのである。

「ばかり」をとともう量化表現に見られる限定解釈は、文脈や先行詞を含めた状況によって導入されるものと考えられる。同様に、比喩表現を用いた極限程度解釈についても、[ϕ ばかり]における ϕ の意味内容によって状況的に導入されるものと考えられる。

以上、[ϕ ばかり]の意味解釈機構について、<状況>と<解釈>との関わりという点から考察を試みた。紙幅の都合もあり述べ尽くせなかった点も多いが、そうした点については別稿で論じることとしたい。

参考文献

- [1] Gawron, J.M. & Harada, Y., 1996, "Indefinites, Conditionals and Quantification," in H.Nakagawa (ed.), *A Cognitive Study of Situatedness in English and Japanese*, Report of the International Scientific Research Program.
- [2] 原田康也・本多久美子, 1996, 「日本語の量化表現における不定指示と共変関係: 「どの」文の解釈をめぐる」, 日本認知科学会第13回大会論文集.
- [3] 原田康也・本多久美子, 1997, 「日本語の量化表現: 「も」の<全称並列>について」, 紀要 52, 早大語学教育研究所.
- [4] 原田康也・本多久美子, 1998, 「<全称>と<存在>: 日本語における量化表現の意味と解釈 その2 [不定語+でも]」, 紀要 53, 早大語学教育研究所.
- [5] 野口直彦・原田康也, 1996, 「とりたて助詞の機能と解釈: 量的解釈を中心にして」, 郡司隆男(編), 制約に基づく日本語の構造の研究, 日文研叢書 10, 国際日本文化研究センター.